慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一インターナショナルとイギリス労働組合運動 : 十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義（その三）
Sub Title	The first international and the British trade union movement : the labour movement and Marxism in Britain
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.2 (1962. 2) ,p.97(1)- 118(22)
JaLC DOI	10.14991/001.19620201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

梅村又次著『賃金・雇用・農業』……西川俊作 110

上野裕也著『日本経済の計量経済学的分析』……西川俊作 110

講座・国際経済・第3巻『国際貿易』……深海博明 111

国民生活研究会編『10年後の国民生活』……佐藤保 112

第一インターナショナルとイギリス労働組合運動

——十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義（その三）——

一、はしがき

二、国際的労働運動の発端

三、同胞民主協会の成立とその没落

飯田鼎

一

歴史を研究する者にとってもっとも警戒すべきことは、その問題への接近の手法において、ともすれば事件の叙述ないし描写におちいり、博引旁証に終始する結果、歴史的な事象の単なる羅列に終ってしまうことではなかろうか。歴史家がたえず心がけなければならない重要な課題のひとつは、いうまでもなく歴史の発展を客観的に把握し、描写もしくは表現することであろうが、同時にそれから得られた素材を基礎として理論的に再構成し体系化することでなければならず、とりわけ現代的な視点からみて、それらの事実の探求がどのような意義をもっているかという熾烈な問題意識にたえず支えられることが必要であると思う。[1] とくに労働運動史や社会運動史の研究は、このような深刻な態度をわれわれにせまってやまない。

労働運動史が、いわゆる歴史学という広い分野のなかでも、労働者階級という近代資本主義社会の成立の落し児であり、産業資本の対立物である賃金労働者階級の研究という特殊な部門であることはもちろんであるが、労働運動がひとつの階級的運動である限り、労働者を階級的に形成せしめる基盤としての資本制生産の発展のテンポあるいはその特殊性によって制約をうけるという事実を否定することはできない。もしそうだとすれば、資本主義発展の不均等という法則的な事実は、労働運動にたいしても、その生成と発展、飛躍と停滞、進歩と反動などのさまざまな局面において、それぞれの特殊性を投影するのみならず、国際的な労働運動への発展の過程において、それらの特殊性がかもし出す諸矛盾が整合されずにむしろ露呈され、象徴的にあらわれざるをえないのは、むしろ当然といわなければならない。

われわれがいまここで問題にするのは、一八五〇年代の初頭、チャーティスト運動がその勢力を失いつつあった頃から、一八六四年の国際労働者協会（＝第一インターナショナル）の成立、そして一八七〇年代におけるその衰亡に至るまでの時期に、主としてイギリスを舞台として展開された国際社会主義および労働運動が、どのような諸契機を通じてその輝かしい成果をおさめ、しかもそれにもかかわらずその内部にどのような諸矛盾を胚胎せしめていたかを明らかにしようとするのである。そしてそのことを通じて、エンゲルスのいわゆる「社会主義の不毛の時期」ともいうべき一八六〇年代において、マルクス主義が、イギリス労働者階級にどのような影響をあたえたか、あるいはまた何故にそれは英国に風土化しなかったか、この様な問題について考えてみようというのである。

国際労働運動におけるマルクス主義の意義を考察する場合に、忘れられてはならないことは、革命的運動の中心の一国から他国への転位という現象である。十九世紀初頭から現在までの国際的労働運動を概観するならば、社会主義的な理論によって武装されたプロレタリアートが存在し、前衛としての革命的なもしくは社会主義政党にその勢力が結集された三つの時期をあげることができないであろうか。ひとつは、一八三〇年代の末期から五〇年代の初頭に至るイギリスのチャーティスト運動であり、そして第三には、一九〇五年の革命から一九一七年のボルシェヴィキ革命の成立にいたるロシア社会民主労働党の運動である。国際社会主義・労働運動の巨大な流れは、このような革命的な諸情勢の成熟にともなって必然的に激化せざるをえない階級闘争の発展のなかで、たえずその急湍を形づくり、その規模を拡大したものであるといっても過言ではない。

こうした視点から、いまこの一八六四年の第一インターナショナルの成立の時期を眺めるならば、おおよそつぎのように理論的に把握することができるのではなかろうか。すなわち、㈠この時期は国際的労働運動が、マルクス主義の理論的影響のもとに本格的にその姿をあらわし基礎を固めようとした時期であるが、同時にブルジョア的急進主義の滲透を根強くうけていたこと、㈡各国における労働者階級の運動は、相互連帯にもとづく国際的な統一への展望を示しながら、同時にその階級意識、組織の程度、イデオロギーなどの点でかなりの不均等がみられ、それらが運動の阻止的要因となったこと、そして最後に、㈢資本主義発展の不均等は英国とドイツに対照的にみられるように、この時期にもっとも鮮明にあらわれ、英国を中心は、よく組織されたプロレタリアートが存在し、階級対立のもっともはげしくなったドイツに移りつつあったことである。

このように考えることによってはじめてわれわれは、一八六〇年代における第一インターナショナルの成立とその崩壊をより理論的に把握することができる。

（1）北村次一氏は、経済史学の現代的課題（経済評論、十二月号）において、社会経済史学のあり方にたいする最近の批判が、いた

ずらな危機感をもってするオーバーな問題意識」にとらわれているとのべておられる。この御意見はもっともであるが、角山栄氏ものべておられるように、従来の経済史学の研究は、あまりにも産業革命以前に集中しすぎてはいなかったろうか。十九世紀後半から今世紀初頭、資本主義の自由競争的な段階から独占段階への時期についての実証的な研究が、わが国の場合、あまりにも少ないという事実の背後には、やはり過去から現在につらなる歴史を探求する者のなかに、ともすれば体制的な危機の認識が稀薄であるという事実と無関係でありえようか。

二

われわれはすでに、資本主義発展の不均等現象が、労働者階級の組織の状態、全体としての闘争力の強さなどに大きな関係をもつことを強調した。一八四八年のフランス二月革命以後、一八七三年、資本主義の全般的な危機の前兆ともいうべき世界恐慌までのヨーロッパの資本主義は、自由競争的な段階から独占的段階への推移の過程のなかで〝世界の工場〟イギリスにたいするドイツ、フランスおよびアメリカ合衆国のはげしい競争を槓杆として発展せしめられたが、労働者階級の階級的形成過程、その組織の程度あるいは階級意識――その革命的社会主義的イデオロギーの滲透の程度をもふくめて――は、その国の資本主義発展のさまざまな条件によって影響をうけざるをえないことは、イギリスとドイツ、そしてフランスの場合を比較すれば明らかである。云いかえるならば、一八四八年の革命の敗北によって、ブルジョア階級が権力の座につくとともに、労働者階級の革命的な運動が退潮期に入ったことは、エンゲルスのいわゆる「ヨーロッパにおける文明の三大国」たるイギリス、ドイツおよびフランスの場合、ほぼ共通した現象ではあったが、その後における労働運動もしくは社会主義運動も、いちじるしく異なった特徴をおびざるをえなかったのである。労働者階級の国際的連帯への動きは、何よりもまずチャーティスト運動のなかに一条の金線の如くに貫流しているのをみるのであって、たとえばその運動の初期すなわち一八三〇年代においてはウィリアム・ラヴェット（William Lovett）、ブロンテア・オブライエン（Bronterre O'Brien）の思想と行動のなかにあらわれていたし、一八四〇年代から五〇年代においては、ジュリアン・ハーニー（Julian Harney）とアーネスト・ジョーンズ（Ernest Jones）の努力が目立っている。

ロンドン労働者協会に拠る主としてオーエン主義の影響と、ヨア急進主義の滲透をうけたラヴェット等の道徳派と、スピッタルフィールドの手織工あるいはテームズ河畔にむらがる波止場労働者や飢餓水準を彷徨するイースト・エンドの不熟練労働者にその支持者の多くをもっていたロンドン民主協会とが、チャーティスト運動の発展の過程のなかで矛盾と対立をはらみ、相互に激烈な競合関係にたちながらも、国際的な労働運動の流れに合流し、その発展に寄与していったことは興味深い。

チャーティスト運動の末期から一八六四年国際労働者協会の建設までのイギリスを中心とする労働運動の国際的な運動への志向をみるに、㈠フランスの革命的民主主義（ブルジョア民主主義）もしくは社会主義運動との関係が次第に、密接になりつつあったこと、㈡ポーランド、ハンガリー、イタリアなどの被圧迫民族の解放運動ときわめて強い結びつきをもつに至ったこと、㈢一八五〇年代に至って、とみに活潑となった協同組合運動が、労働者階級の国際的交流に大きな貢献をしたことなどがあげられよう。そこでわれわれは以上の三点を国際的な労働運動成立のモメントとしてとらえることにしよう。

十九世紀初頭のイギリス労働運動は、たえず、フランスにおける数度の革命によって新しい刺戟をうけ、フランスの社会主義はイギリス社会主義および労働運動に理論的な基礎をあたえたのであった。フランスでは一八三〇年のいわゆる七月革命後、ブルジョアジーが政権を完全に掌握し、急速に産業革命がおこなわれた。その結果、繊維工業地帯リヨンに、近代的な労働者階級の最初の蜂起がおこったのであって、レーニングによれば、すでに一八三一年にリヨンで創刊された「エコー・ド・ラ・ファブリーク」（Echo de la Fabrique）では、「闘争中の英国労働者階級との連帯が強調された」といわれる。(1) と同時に、ナンツの労働者は、イギリスの労働組合に挨拶をおくり、その冒頭に、「あらゆる国の労働者階級は兄弟である」

第一インターナショナルとイギリス労働組合運動

ことを強調した。(2)

フランス革命は、個人の自由を宣言したのみならず、諸国民の自由をも謳歌することによって、絶対主義的な王政打倒のたたかいを、被圧迫民族の解放、その民族的統一のための運動に結びつける契機をつくり出した。一八三一年マッツィニの努力により、スイスに「若きイタリア連盟」(Young Italy Society)が生まれ、この運動につづいて「若きポーランド」(Young Poland)および「若きドイツ」(Young Germany)が結成され、そしてついに一八三四年カルボナリ党の伝統をうけつぎ、自由・平等・友愛を宣言する「若きヨーロッパ」の運動が展開された。だがこうした民族主義的な運動が、ヨーロッパ大陸のそれらの国の労働者階級の未成熟のために、最初は主として革命的民主主義（＝ブルジョア民主主義）を指導理論としていたが、やがて社会主義思想の普及にともなってこれと結びつき、プロレタリア国際主義の基礎が据えられるのであるが、こうした労働者階級の国際的交流の実現のために先駆的役割を果したのは、階級意識とその組織の面でもっとも先進的であったイギリス労働者階級であり、チャーティストであった。

ロンドン労働者協会は、ウィリアム・ラヴェット(William Lovett)、ヘンリー・ヘザリントン(Henry Hetherington)、ジェームズ・ワトソン(James Watson)、ジョン・クリーヴ(John Cleave)をその主要な指導者として、一八三六年六月建設された。その八項目から成る綱領第一条、「都市および田園の労働者階級の智的なそして影響力のある部分を、統一のきずなに糾合すること」には、明らかにオーエン主義の根強い信奉を読みとることができるし、またロンドン民主協会と対抗していわゆる「道徳派」と呼ばれるにふさわしい綱領でもあるが、しかし一八三六年十一月、ベルギーの労働者階級に兄弟としての挨拶をおくったことは、この協会が労働者階級の国際的連帯の行動をきりひらくという歴史的栄誉を担うものであった。(3)この運動は、ベルギーの労働者ヤコブ・カッツ(Jacob Katz)が、仲間の労働者と不満を話し合うために集会を開いたところ、官憲に捕えられるという事件に端を発した。(4)

ロンドン労働者協会からの熱烈な激励のアピール――オーエン主義の思想的影響も生々しい(5)――に答えて、ベルギーの労働者からの挨拶がおくられたのであるが、しかしその後間もなく、オーエン主義よりもむしろフランス啓蒙思想ないし革命的民主主義、そしてさらにフランス社会主義からその理論的武器を見出したチャーティストの他の流派、ロンドン民主協会の人々、オコンナー、オブライエンそしてジュリアン・ハーニー等もまた活潑な運動を展開した。民主協会は、フィアガス・オコンナーによって、ロンドン労働者協会のオーエン主義・ブルジョア民主主義(6)に対抗するものとして一八三七年に建設されたが、オコンナーとともにすぐれた理論的な指導者であったオブライエンは、一八三六年フランスにゆき、またブオナロッティの「バブーフの陰謀の歴史」を翻訳し、バブーフのジャコバン主義を鼓吹することによって、チャーティズムにおける左翼を形成した。彼はすでに一八三八年十一月、英・仏両国人民の友好を訴えたのみならず、故郷アイルランドの被圧迫民族としての悲惨な状態を訴え、チャーティストの注意を喚起した。(7)オブライエンのイギリス社会主義史上における特異な地位は、フランス社会主義の革命的思想の系譜、バブーフ＝ブオナロッティを紹介し(8)、みずからもまたチャーティスト左派として、オコンナーとは異なる独自の理論に到達した点にあった。

このようにチャーティストは、その運動の草創期ともいうべき一八三〇年代においてすでに国際的な労働者階級の運動に関心をよせていたのであって、この意味においては、一八四八年以後のハーニーやジョーンズの、主としてマルクス主義の指導のもとにすすめられた運動のための伏線をなすものであったといえよう。ところで、さきのベルギーの労働者へのチャーティストの呼びかけが、ドイツ語に訳され、正義者同盟(Das Bund der Gerechten)によってばらまかれたことは(9)、ドイツの労働者階級に大きな影響をあたえたのみならず、ここに、少なくとも労働運動の古典的発祥地イギリス、市民革命にともなう熾烈な階級闘争の経験を通じて、世界の革命運動の〝メッカ〟とも呼ばれたフランス、そして経済的社会的状態においてはるかにおくれていたけれども、やがて科学的社会主義を生み出すに至るドイツ、この「ヨーロッパの三大文明国」の労働

者の間を結びつけるのに何らかの役割を果したといえよう。またチャーティストは、サン・シモン主義によって影響されたカトリック系の社会主義者ブシェ（Buchez）の信奉者によって一八四〇年に発刊された新聞「ラテリエ」（L'Atelier）に結集する労働者とも交通したのであるが[10]、この運動の意義は、サン・シモンがその「ヨーロッパ社会の再組織」（Reorganisation de la Société européenne）において提案したヨーロッパ国家連盟の構想が[11]、フランスおよびイギリス議会の指導のもとにおける英仏連合という、甚だブルジョア的ながら、当時としては国際的な機関を通じての労働問題の解決をはかるというヨーロッパ経済共同体を示唆することによって、やはりインターナショナリズムへの前段階を意味していたことである。サン・シモンやフーリェなどの空想的社会主義者の影響をうけ、同時に英国での滞在中にチャーティストを識ったフロラ・トリスタン[12]（Flora Tristan）が、国際的な労働者の組織化のために、イギリス、ドイツおよびイタリアなどのヨーロッパ諸国の主要な都市に、通信委員会（Correspondence-committee）を結成することを試みたことも興味深い。

だが、フランス革命およびその後の社会主義および共産主義の影響を、もっとも直接的に且つ深刻にうけたのは、ドイツの社会主義者あるいは意識のすすんだ労働者であった。

「貴族、農奴、賦役農民、自由農民、小市民、職人、マニュファクチュア労働者、ブルジョアおよびプロレタリア、つまり第十世紀いらい歴史のなかにあいついでうかびでてきたすべての身分や、すべての階級が、あいかわらず肩をならべて存在している[13]」という一八四八年の革命以前のドイツは、エンゲルスをして、「ルンペンは、二、三ターラーももらえば、ブルジョアジー、貴族および警察間の喧嘩を、彼らの手足となってたたかいぬく……ドイツの労働者大衆も、公けの問題の指導をひきうけるだけの準備がまだできていない[14]」と慨嘆せしめた旧態依然たる状態であったが、しかしそれでも労働組合の先駆的型態ともいうべき「労働者教育協会」（Arbeiterbildungsverein）が十九世紀初頭には建設されて、かなりの労働者が組織されていた[15]。そこでメーリングが、ドイツの労働運動とドイツの社会主義の国際的傾向を強調し、とくにドイツ労働者階級の運動を、国際社会主義運動と結びつけたものとして「正義者同盟」（Das Bund der Gerechten）をあげていることが重要となるが[16]、この運動は、ウィルヘルム・ウァイトリングの活動ときり離して考えることはできない。

一八三〇年、フランス七月革命を経験し強い感動をうけたパリ在住のドイツ人は、ドイツにおける言論の自由を確保するために出版協会（Press Society）を建設したが、これは次第に帝政ロシアの圧制に抵抗するポーランドの亡命者をもいれるドイツ国民協会（Deutsche Volksverein）となった。小国分立と封建的残滓に悩むドイツの社会主義者・民族主義者との間に深い友好の精神が保たれたのは、民族の独立と民族的統一への両者の熱望が合致した結果にほかならない。第一インターナショナルの運動の背景を考える場合に、被圧迫民族の国際的連帯のためのポーランド亡命者の卓越した役割を忘れてはならない。要するに一八三〇年代から四〇年代にかけてヨーロッパはフランスを中心とする革命的動乱の渦中に国籍や民族の相異をこえて、社会主義者、民主主義者および民族主義者が相互に結びついていた時代であり、その典型ともいうべきものを、われわれはウィルヘルム・ウァイトリングにみることができるであろう。

ウァイトリングの思想および運動の国際的性格は、彼がフランス人の父とドイツ人の母の間に生まれたという出生の秘密もさることながら、ドイツ、フランス、スイスそしてイギリスなどの労働者階級による国際的な革命運動に関係し、革命的共産主義の理論を体系づけたことであり、マルクスおよびエンゲルスの科学的社会主義以前に、労働者階級の共産主義の最初のドイツ的プログラムをつくり出した点にあった。彼の共産主義が、一八三〇年代のドイツのおくれた状態を反映して、職人的・手工業的生産（＝問屋制家内工業）からマニュファクチュア生産の定礎期という制約からまぬがれることのできなかったという事実は、その空想的性格を象徴するかのような「共産主義にもとづく給食所」（kommunistischer Speiseanstalten）、ルンペン・プロレタリアートの革命における役割の重視、アナキーの礼讃、メシア思想への共鳴[17]などにあらわれている。

すでにのべたように、ドイツ国民協会は、民族主義者・共和主義者および社会主義者などの亡命者のフランスにおける

ループであって、このなかからやがて革命的政治的な秘密結社、「亡命者同盟」（Das Bund der Geächten）が生まれ、ドイツの亡命者ヤコブ・ヴェネディ（Jacob Venedey）とテオドール・シュスター（Theodor Schuster）がその指導者となった。しかしこの団体はもともと雑多な思想的傾向を有する各国の亡命者のルーズな集まりであったため、やがて共和主義的な人々と社会主義的な原則を主張するグループとの間の矛盾が激化し、後者は一八三六年「正義者同盟」を結成したことは周知のところである。正義者同盟は、バブーフの影響をうけた革命的・共和主義的な団体と密接な関係にあり、その結果一八三九年の叛乱にまきこまれ、多くの会員が殺され、投獄され、あるいは逃亡したのであった。難を逃れてロンドンに移ったカール・シャッパー（Karl Schapper）とハインリッヒ・バウア（Heinrich Bauer）は、そこで、ロンドン在住のドイツ人亡命者のさまざまなグループを組織して、「ドイツ労働者教育協会」（Deutsche Bildungsverein für Arbeiter）を結成し、また彼ら自身は、正義者同盟のロンドン支部をつくった。[18]

しばしば指摘されるように、一八三〇年代から一八四〇年代にかけてのフランス社会主義運動を概観するならば、大別して二つの流れ、すなわちひとつは、サン・シモンとその弟子ピェール・ルール（Pierre Leroux）の流れをくみ、フーリェとその弟子ヴィクトル・コンシデラン（Victor Considérant）の流れをくむものである。これは、キリスト教的封建的ローマン主義とプルードンのブルジョア的無政府主義との間をただよういわゆる空想的社会主義者の運動と、いまひとつは主として一八四〇年以後にあらわれる共産主義の運動であって、はじめはブルジョア共和主義運動からぬけきれなかったが、その後バブーフの友人ブォナロッティの影響のもとに発展していったジャコバン主義的な影響の上に立つ共産主義である。ラポンヌレー（Laponneraye）、ラオーディエール（Lahautière）のように、フランス革命の自由と平等の理想という合理的な方法によって、共産主義を実現できると信じていたグループと、デザミ（Dezamy）やブランキ（Blanqui）のように、唯物論的な共産主義に立って、人間に幸福と友愛をもたらすために、社会組織の根本的変革を実現しようとする労働者共産主義とがあった。[19]

この共産主義運動の後者こそ科学的社会主義の先駆的な形態であって、ウァイトリングもその影響をうけた。一八三八年、彼は、正義者同盟での活潑な討論とはげしい勉強によって、その処女作「人類――その現在および将来」（„Die Menschheit, wie sie ist und wie sie sein sollte"）を秘密出版し、これによってドイツにおける最初の共産主義理論家となったのである。このパンフレットには、私有財産、貨幣および商業の批判において、フーリェおよびプルードンの影響がみられるが、ともかく体制としての資本主義にたいする科学的批判があらわれたことは、彼をして国際社会主義運動の中心的人物にまでのし上げたのであって、いままでおくれていたドイツの社会主義運動を、イギリス労働運動およびフランス社会主義の水準にまでひき上げると同時に、これらの結びつきを強化することに貢献した。こうして労働者階級による国際的・民主的運動は、イギリスのチャーティストとフランスのジャコバン主義の上に立つ共産主義者との交流を根幹として、ドイツの労働者共産主義がこれに加わり、さらに帝政ロシアの圧制に苦しむポーランドの民族主義者をはじめ、オーストリア・ハンガリア帝国の重圧と植民地支配に悩するイタリアの民族主義者などをひきいれることによってより活潑となり、国際的な組織の結成がおしすすめられたのである。

しばしばくり返すように、一八四八年以前の国際労働運動の特徴は、資本主義発展の不均等が、労働運動および社会主義運動の上にも投影していたことである。イギリスにみられる発展した革命的運動と労働組合、フランスの革命的共産主義、ドイツのおくれた状態に照応するウァイトリングの未熟な共産主義の理論などの差異からも明らかなように、運動をになうプロレタリアートの成熟の程度、組織の状態は必ずしも一様なものではなく、とくに重要なことはイデオロギーとしての社会主義や共産主義の労働者階級にたいする滲透の度合も、いちじるしく異なっていたことが考えられる。だがこうした矛盾をはらみながらも、一八四四年、カール・シャッパーおよびオボルスキー等によって、「あらゆる国民の民主的な友の会」（The Democratic Friends of all Nations）が結成されたことは、各国の資本主義発展にいちじるしい不均等がみられ、社会主

義の理論そのものにも国によってさまざまなニュアンスが認められたにもかかわらず、一八四八年のブルジョア革命においてきわめて重要な役割を演ずべき革命的プロレタリアートが、その姿をあらわしつつあったことを物語っている。

(1) A. Müller Lehning; The International Association (1855-1859). A Contribution to the Preliminary History of the First International (International Review for Social History, edited by The International Institute for social History Amsterdam, Vol. III, p. 186).

(2) ibid: pp. 186—187.

(3) レーニングは、ベルギーの労働者階級にあてたこの文書によって、ロンドン労働者協会が、「異なった国々の労働者の間の国際的な挨拶の様式を最初に紹介するという栄誉をになう」というラヴェットの言明が正しくないことをのべている (ibid; p. 188)。しかしその理由について何もふれていない。

(4) The Life and Struggles of William Lovett in his Pursuit of Bread, Knowledge, and Freedom; with some Short Account of the different Associations he belonged, and of the opinions in entertained, 1876, p. 98.

(5) といっても階級的視点に立っていないという意味ではない。いやむしろ階級的な立場は明白である。しかしそれにもかかわらず、労働者階級に根強くはびこっている無智と偏見をとり除くことを強調し、教育の力を重視していることは否定できない。たとえば、つぎの一節をみよ。

「……しかしながら、われわれの解放は、すべての国の労働者階級の間における知識の程度に依存するし、また社会におけるわれわれの真の立場を感ぜしめることにおいて、またわれわれが富の生産者であるところから、まず第一にそれを享受する正当な根拠を有するものであること、教育というものは、知性をおしすすめ、人々をしてよりよく社会におけるそれぞれの義務を遂行させる準備をするので、教育の手段をつくり出す者は、その利益にたいする平等にして国民的な権利をもつこと、政府は万人の利益のためにあるものなので、万人はそれぞれの才能に従って、その仕事のどれかをおこなうに等しい権利をもつこと……をわれわれに感ぜしめることにおいて、その有益な結果に依存するのだ」(Life and Struggles, pp. 98—99.)

(6) つまりレーニングは、ロンドン労働者協会のベルギー労働者への訴えをもって、階級闘争の国際的性格と勃興しつつあったヨーロッパ労働者階級の国境を超えた連帯を代弁する文書であることを強調している (Lehning, p. 189)。しかしこれには階級闘争的であるよりは、オーエン的道徳派的影響がにじみでており、国際社会主義運動のなかで、マルクス主義およびフランス共産主義などとともに、この点を高く評価すべきであろう。

(7) Max Morris; From Cobbett to the Chartists, History in the Making, edited by D. Torr (Nineteenth Century Vol. I. 1815-1848), pp. 243—245.

(8) バブーフとブオナロッティとの関係については、豊田堯「バブーフの時代——フランス革命の研究」(創文社一九五八年) を参照。とくに第三篇バブーフの陰謀事件にくわしい。またブオナロッティのオブライエンにあたえた影響として若干ふれているものは、レーニングの論文「ブオナロッティとその国際的秘密組織」(International Review. Vol I. 1956) Elizabeth L. Eisenstein; Filippo Michele Buonarroti—the First Professional Revolutionist, 1959, London. がある。また邦文では水田洋・玉枝夫妻の「社会主義思想史」がくわしい。

(9) Lehning; ibid., pp. 190-191.

(10) Lehning; ibid., p. 191.

(11) ガローディによれば、「一八一四年以後、サン・シモンは、憧憬の目をもってイギリスの例に思いをはせ、議会主義を夢み、議会の経験がゆたかだという理由で三分の二の議席をイギリス人にあたえる仏英議会さえも想像している」と。〔Roger Garaudy; Les Sources françaises du Socialisme scientifique, 1949. 平田清明訳「近代フランス社会思想史」〔ミネルヴァ書房、一九五八年〕一三九頁〕。

(12) やはりガローディは、フロラ・トリスタンについて、つぎのようにのべている。「彼女はその不断の活動と一八四三年の彼女の著書『労働者の団結』(L'Union des Travailleurs) によって、近代的な形態での労働者によるサンディカリスムの先駆者とされている。彼女は、《国際的規模における労働者の全般的団結》について研究し、資本家の不当搾取のない、労働者間のみでの利益の分配を予見している」。(ガローディ、前掲書一四六頁)

(13) マルクス・エンゲルス選集 (大月版) 第一巻一四二頁、エンゲルス「ドイツのスタットウス・クオ」。

(14) 上掲書、一四一頁。

(15) オーベルマンによれば、一八四〇年にすでにベルリンにおいては手工業者の組合 (Hand-werker-verein) がつくられていたといわれる。そして当時のすぐれた組織者シュテファン・ボルン (Stephan Born) は、これを、「たんに労働者階級のみならず、あらゆるベルリンの社会層の成長する革命家たちにとって、ひとつの陶冶の場所である」と高く評価したといわれる (Karl Obermann; Die deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848, 1953, SS. 60—61).

(16) Franz Mehring; Die Geschichte der Deutschen Sozialdemokratie, Gesammelte Werke, 1960, Bd I, S. 1.

(17) Waltraud Seidel-Höppner; Wilhelm Weitling, der deutsche Theoretiker und Agitator des Kommunismus, 1961, S. 32. 最近におけるウァイトリングの研究として、Wolfgang Schieder; Wilhelm Weitling und die deutsche politische Handwerkerlyrik im Vormärz — vergessene politische Lieder aus der Frühzeit des deutschen Frühsozialisten. (International Review of Social History, Vol V—1960—Part 2) は、詩人としてのウァイトリングの遍歴を描いて興味深い。

(18) Lehning; ibid., pp. 194—195.

(19) ガローディ、前掲書。

三

一八四五年という年は、第一インターナショナルの原型ともいうべき国際的な労働者階級の組織「同胞民主協会」(Society of Fraternal Democrats) の結成をみたという意味で歴史的な年であった。すでにみてきたように、イギリス、フランスおよびドイツを中心とする労働者階級の国際的連帯への行動は、一八三〇年のフランス七月革命とその後に急速にあらわれた反動期のもとで、次第にその組織的な動きをはじめた。同胞民主協会の建設は、イギリスのチャーティスト、とくにその指導者ジュリアン・ハーニーとアーネスト・ジョーンズ (Ernest Jones) の努力によるところが大きい。われわれはここで、この二人のチャーティスト指導者の国際的な労働者階級の運動への貢献を評価すると同時に、そのなかでも指導的な勢力ともいうべきイギリス労働者階級、とくにチャーティスト内部における矛盾の激化についてふれておく必要がある。なぜなら、これはハーニーおよびジョーンズ等の国際的運動への志向と全く無関係ではありえないからである。

ハーニーが、チャーティスト運動の初期から活躍し、ラヴェットの「道徳派」(ロンドン労働者協会) にたいしてオコンナーとともに「実力派」(ロンドン民主協会) を結成したことはすでにのべたところである。大陸の労働運動へのよびかけにおいて、先駆的な偉業をうちたてながら、一八四〇年代におけるイギリスを中心とする国際的社会主義・労働運動のたかまりのなかで、ラヴェットを中心とする道徳派が次第に孤立を深め、それらの人々の影響が排除されてしまったという事実は、やはりオーエン主義に内在する空想的性格、革命にたいする認識の欠如に由来しているとはいえないだろうか。[1] すなわち一八四〇年代においては、空想的社会主義としてのオーエン主義は、国際社会主義運動に関する限り、そのイデオロギーとはなりえず、次第にマルクス主義の理論的影響をうける基盤が形成されつつあったとみられるであろう。

一八四二年の第二次国民請願後、チャーティスト運動は、オコンナーの「土地計画」(The Land Scheme) にその勢力を奪われてゆくのであって、ショイエンによれば「土地計画[2]もチャーティズムも、一八四三年から四六年の時期においては枝葉末節の問題にすぎない」というのであるが、[3] この土地計画へのチャーティストの吸収、従ってその戦闘的精神の喪失にともなう衰勢——その兆候は一八四四年ノーザン・スター・アンド・リーズ・ジェネラル・アドヴァタイザー (Northern Star and Leeds General Advertiser) からノーザン・スター・アンド・ナショナル・トレーズ・ジャーナル (Northern Star and National Trades Journal) へと名前を変えた機関紙の発行部数のいちじるしい減少にあらわれていたが——これを挽回しようとする努力こそ、チャーティスト指導者の国際的な社会主義運動へのより熱心な参加となったとみては間違いであろうか。ただ問題は、一八四五年の同胞民主協会に結集した国際的な労働者階級の代表、社会主義者および民族主義者の動きをチャーティストがどのようにみていたかということである。ロートシュタインによれば、同胞民主協会は、「すでに英国に存在している諸政党に加えるに、いかなる政党をもつくることを望むものではない」という原則にもとづき、[4] チャーティストとの競合関係ないしはそれにとって代るような態度を一切さけたのであって、ここにイギリス労働運動の尖兵ともいうべきチャーティストと国際社会主義運動との微妙な関係がある。すなわちチャーティスト運動の展開そのものにみられる社会主義的性格と階級的な要素にもかかわらず、やはりナショナリズムとインターナショナリズムとの関係についての正しい理解は、階級意識の高いイギリス労働者階級にとってすらきわめてむずかしい問題であって、[5] わずかにオブライエン、オコンナー、ハー

ニーおよびジョーンズなどの主要な先駆的な指導者によって把握されていたにすぎない。つまり、一般のチャーティストからなる大衆団体や労働組合などの組織の同胞民主協会への参加がみられず、たんに外国の革命的な亡命者や共産主義者の集まりにしかすぎず、その綱領における革命的共産主義の高唱にもかかわらず、イギリス労働者階級をひきつけることができなかったのは、ひとつには、土地計画による勢力の分散と、やはり共産主義革命の強調という視点から、マルクスの共産党宣言にみられるように資本主義の将来にたいする楽観的なみとおしによって行動したという事実によっている。そしてこの事実は、一八四八年の革命後同胞民主協会が何故に急速に崩壊しなければならなかったかを物語っている。しかしそれだけではない。イギリス労働者階級の革命にたいするアパスイや資本主義の変貌によってのみ説明するだけでは、必ずしも充分ではないであろう。

主としてマルクス主義のイデオロギー的な影響のもとに立っていた同胞民主協会は、ロートシュタインものべているように、「民主的・共産主義的な団体」であり[6]、ハーニーは、英国代表の専任書記として重要なポストをしめていた。そしてこのハーニーを通じて、この時期のチャーティスト運動家のひとりアーネスト・ジョーンズは、マルクスおよびエンゲルスと接触する機会をもったといわれる。彼はハーニーと同じくマルクス主義の影響をうけたが[7]、チャーティストの再組織について独創的な見解を抱き、マルクス主義的認識を通じて、イギリス社会主義の将来にたいする鋭い洞察力をもつに至った。彼はチャーティスト運動における「実力派（フィジカル・フォース）」と「道徳派（モラル・フォース）」の区別、その派閥的対立を嫌い、労働者階級の解放のために小異を捨てて大同につくことを訴えたのみならず[8]、大衆政党の必要性を力説し、そうした認識の上に立ってさらにチャーティストの六点と呼ばれた基本的な綱領にさえ批判検討を加えたといわれる[9]。従ってその意味では、ジョーンズは同志ハーニーとも全く同じ思想をいだいていたわけではなかったし、大陸からの革命的亡命者とも異っていた。このように運動の将来にたいする見通しの相異、とくに比較的おくれてチャーティスト運動に参加したジョーンズの場合、政治と経済との接点としての社会主義運動についてのプログラムを描くことによって、チャーティスト運動を一歩前進せしめようと努力したことは認められるのであって、ここに、彼の後期チャーティスト指導者としての特異性がある。たとえば彼は、一八四七年七月の総選挙の際に、ハリファックスの選挙民にたいし、チャーターの六点を説明したあとで、国家からの教会の分離、任意の教育制度、死刑および救貧法の廃止、長子相続制および直接課税制度の廃止、小所有者制度の拡大（an extension of the small proprietary system）、自由貿易の原則の一般的な適用などについて力説したといわれる[10]。

ここにはあまりにも濃厚に小ブルジョア的な急進主義の影響が感じられるのであって、彼の頭のながには、チャーターを獲得するための組織としての大衆的社会主義政党の構想が素描されていたと同時に、ブルジョア急進主義の滲透をうけたという事実は、ジョーンズにおいて、当時のイギリス労働運動、なかんずくチャーティスト運動が内に秘めている複雑な様相、その矛盾および苦悩を忠実に反映しているように感じられないだろうか。

同胞民主協会は、のちの第一インターナショナルにみられるように、行動のための組織というよりはむしろ宣伝のための団体であり、その活躍は、一八四六年から四七年、そしてフランス二月革命の勃発とチャーティストの第三次国民請願において最高潮に達した。一八四八年におけるチャーティスト運動の復活の歴史的意義については、世界史における資本主義の体制的な危機の最初の兆候であり、フランス二月革命にはじまり、ドイツ三月革命さらにオーストリア、ポーランドおよびイタリアにおける政治的変動をひきおこす直接の契機となった過剰生産恐慌の勃発ときりはなして論ずることはできない。われわれはすでに資本主義の不均等発展という法則的な事実が、労働者階級の組織および運動にも、その形態およびテンポという側面において、つねに作用するという点を力説した。従って、労働者階級の国際的連帯の精髄ともいうべき同胞民主協会が、一八四八年の革命の勃発の直前および直後において、輝かしい足跡を残しながら、革命の退潮期そしてそれにつづく反動期に次第に衰滅せざるをえなかったのは、この国際的な組織の脆弱性および機構の不完全によることはいうまでも

ないが、やはりこの国際的な運動をささえている各国の労働者階級の運動の不均等という事情を考慮されなければならない。

一八四八年恐慌のイギリスにおける重要な結果としてのチャーティスト運動が、四月十日のケンニングトン広場における弾圧によって恢復しがたい打撃をうけ、これを契機としてもたらされたチャーティスト運動の衰勢が、そのまま労働者階級による社会主義的・国際的な組織としての同胞民主協会の崩壊につながるところに実は大きな問題が存在するように考えられないだろうか。すなわち同胞民主協会のイギリス労働運動への一方的な依存、そしてそのイデオロギーとしてのマルクス主義の一八四五年以後におけるチャーティスト運動の革命的側面のみの評価[11]――これは「共産主義の原理」から「共産党宣言」に至る初期マルクス主義における理論的思想的限界としてのプロレタリア革命観に特有な視点であるが――に象徴的にあらわれた国際的社会主義運動における理論的な欠陥こそ重要なのである。一八五〇年代以後チャーティスト運動におけるジョーンズやハーニーの努力は、同胞民主協会の衰勢を阻止しようとする彼らの運動と裏腹の関係を有していたにもかかわらず、その衰勢をいかんともなしがたかったのは、ひとつにはチャーティスト運動そのもののブルジョア急進主義からのイデオロギー的滲透をまぬがれることができなかったという事実、いいかえるならば、ジョーンズおよびハーニーの、当時の国際社会主義運動の理論、その支配的イデオロギーたるマルクス主義路線からの逸脱――その背後にはチャーティストに代る勢力として登場しつつあった全国的職業別組合および協同組合運動の彼らにたいする影響があったという有力な条件があるが――にみられるような客観的諸情勢の変化が指摘されるが、同時に、一八四八年以後におけるヨーロッパ大陸諸国における労働者階級の運動と、革命の発展段階におけるさまざまな諸条件とのからみあい、これらがこの国際的革命的運動に微妙な陰影を投じたことは疑いえない。

エンゲルスは、「ギゾー政府打倒！」に端を発したフランス二月革命についての非常に正しい分析にもとづき、ギゾーのあとにくるものが何であるかを明らかにしつつ[12]、フランス共和国樹立のための労働者階級のはげしくも勇敢な闘いを高く評価しているが、これがさらにベルギーそしてとくにドイツにどのような影響を及ぼすかに注目している[13]。ところがベルギー政府が反動化し、マルクス夫妻の逮捕そして国外追放がおこなわれ、ベルギーにおけるドイツ人の民主主義運動は、ブリュッセル民主主義協会の運動にもかかわらず弾圧されるに至った。これはいうまでもなく一八四八年恐慌の結果、パリ株式市場の暴落のあおりを喰ったベルギーの株式市場の危機――ベルギー共和体制の転覆の危機――を敏感に感じたブルジョア階級の反応というべきであろう。

さてドイツにおいては、一八四八年当時、「全ドイツは、単一不可分の共和国であると宣言される」という「ドイツにおける共産党の要求」[14]の第一条にみられるように、数十の小邦分立と絶対主義的・封建的残滓が、民主主義の発展をはばみ、フランスのプロレタリアートが蜂起して、バリケードによる市街戦をおこなうほどに成長しているのに比べ、その階級意識、組織および戦闘力においてはるかにおくれていた。マルクスとエンゲルスは、一八四八年六月、主としてフランス二月革命の状勢をドイツ人民に正確に報道し、これを通してドイツにおける民主主義運動を活潑にし、さらに進んで、ポーランド人、チェック人、ハンガリア人およびイタリア人などのいわゆる被圧迫民族の独立、および民族的統一をたすけるという国際的な目的のために新ライン新聞を発行したが、ここには、パリの六月蜂起にたいする詳細な報道、敗北こそしたけれどもパリの革命的な労働者にたいする惜しみない賞讃が行間にあふれているのに反し[15]、フランスのプロレタリアートの革命的闘争とドイツの労働者階級の階級意識のめざめにおどろかされて、封建的反動との取引に身をまかせたドイツ・ブルジョアジーの俗物性をはげしい口調をもって暴露している[16]。そこでドイツの中間階級と労働者階級の大部分が、「近隣諸国民の自由こそ自分たちの自由を保障するものであることを理解し、ないしは感じとっている」と評価しているが、ここではっきりと感じられることは、やはり革命の伝統をもち、すぐれて組織され、しかも武装蜂起も敢えて辞しないフランスの革命的プ

ロレタリアートとシュテファン・ボルン（Stephan Born）の指導のもとに次第に組織されつつあったとはいえ、せまい職場的・職業的な利益に運動を限定したドイツ労働者教育協会に加入していたプロレタリアートとの階級意識、戦闘力および組織の程度などにおけるいちじるしい格差である。高度の階級意識に目ざめ、発達した堅固な労働組合の組織をもち、十数年にわたる革命的大衆運動を導いてきた社会主義の豊かな理論と経験を有し、ブルジョアジーにたいするこの上ない憎悪にもえたプロレタリアートの大衆――イギリス、革命の伝統に輝き、革命的共産主義の理論に武装され、蜂起して市街戦を展開する勇気をもちながら、それがつねにパリ周辺にとどまっているために敗北せざるをえなかったフランスのプロレタリアート――フランス、そしてマルクスおよびエンゲルスの共産主義の哲学的基礎がまさにそこにおいて生み出されながら、ドイツのいわゆるスタットゥス・クオのために、すなわちブルジョアジーをしてユンカーの下僕たる地位に甘んぜしめる封建遺制にわざわいされて、充分な階級的成熟をみないプロレタリアート――ドイツ。

こうした諸条件を把握した上でわれわれが一八四八年の革命後に急速に退潮期に入ったプロレタリアートの国際的な運動としての同胞民主協会について考えるならば、そこには、イギリスのプロレタリアート、たとえばハーニーやジョーンズのようにすでに社会主義政党のプログラムを提出しつつあった国と、ドイツのように、ブルジョアジーの絶対主義権力にたいする勝利を確立することができず、従って労働者階級の組織の発展が充分ではなかった国との間に、いちじるしい不均等がひとつの矛盾として表面化したことである。とくに同胞民主協会をささえる主要な担い手である人々、たとえばカール・シャッパーやヨーゼフ・モル（Joseph Moll）のように祖国の労働者の組織との関係が稀薄であり、いわゆる政治的亡命者として活躍していた場合には、チャーティストたちの活動そのものにその運命を託することとなるのは当然である。同胞民主協会は、たしかに第一インターナショナルの先駆的形態であり、それは一八五四年の国際委員会（International Committee）の結成のための礎石となったことは事実である。それがチャーティスト運動に支えられ、その結果としてチャーティストの衰勢とともに次第に消滅に赴かざるをえなかったのは、ひとつには、外国人取締条令（Aliens Act）や言論統制令（Gagging Act）にみられるような弾圧もさることながら、もっとも重要なことは、資本主義発展の不均等という法則的な事実がもたらす各国の労働者階級の組織の不均等の結果としての、内部的諸矛盾が基本的な要因となったものとみることは認められるべきではなかろうか。ではつぎにわれわれは、このような視角をもって、一八五〇年代から第一インターナショナル成立までの国際的社会主義運動の発展を追求することにしよう。（未完）

（1） Lovett; ibid., pp. 307—308.

（2） オコンナーの土地改革思想は、トム・ペイン、ウィリアム・コベット、スペンス等の急進主義の系譜の上にあり、むしろそれらが混在している。そしてそこにこそ彼のチャーティストとしての悲劇性がある。

（3） Schoyen; The Chartist Challenge, 1958, p. 132.

（4） Th. Rothstein; From Chartism to Labourism, Historical Sketches of the English Working Class Movement, 1929, pp. 129—130.

（5） この点については、エンゲルスが一八四五年の末に執筆して一八四六年の末に『ライン年誌』第二巻に発表した論文「ロンドンにおける諸国民の祝祭」がもっとも味わうべきであろう（マルクス・エンゲルス全集、大月版、邦訳第二巻六三七頁）。

（6） Rothstein; ibid., p. 132.

（7） ここでひとつひとつ引用する暇はないがマルクスおよびエンゲルスのハーニーおよびジョーンズにたいする交友、その熱烈な同志としての感情から冷淡な隣人へのうつりかわりについては、マルクス・エンゲルス往復書簡（一）一八四四年十月～一八五一年六月（岡崎次郎訳）岩波文庫を参照。

（8） Northern Star, April 1, 1848 (J. Saville's Ernest Jones, Chartist, 1952, pp. 97—99.)

（9） Saville; ibid., p. 29.

（10） Saville; ibid., p. 25 and p. 95.

（11） この点については拙稿「十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義」（その二）を参照。

(12) マルクス・エンゲルス全集第四巻（大月版）邦訳五四五頁。（「ブルジョアジーは彼らの革命をなしとげた。彼らはギゾーとともに大株主どもの独占支配を転覆した。いまやしかし戦の第二幕においては、もはやブルジョアジーの一部が他の一部と対立しているのではなく、いまではプロレタリアートがブルジョアジーに対立しているのだ。」）

(13) 前掲書五四八頁。

(14) これは、マルクスおよびエンゲルスが、一八四八年三月二一日から二九日までの間にパリで書いたものであり、ドイツ革命の開始にあたって共産主義者同盟の政治的綱領となったものである。マルクス・エンゲルス全集第五巻三頁。

(15) マルクス・エンゲルス全集第五巻一二三頁。

(16) 前掲書第五巻一三二頁、「ケルン新聞の六月革命論」。

経済発展段階と所得分配

——均衡成長と均衡分配の条件——

丸尾直美

一、問題の提起

私はこの稿で、経済が発展するにつれて、経済成長率、資本係数、利潤（または賃金）分配率、資本利潤率、投資率などの相互関係がどのように変化するかを明らかにしたいと思う。それは一種の成長段階説とも言えるものであるが、この稿では特に成長と分配との関係に焦点を合わせてみたい。

成長段階説としては、既にロストフの説があり、成長率、資本係数、分配率の歴史的動向についてはクズネッツの帰納的な研究もある。また、N・カルドアも、資本係数、分配率、生産高の歴史的動向に注目して、一種の段階説的主張をしている。更にもっと古くは、マルクスが、資本主義が発達してゆくにつれて、資本利潤率、資本の有機的構成、賃金と利潤の分配関係がどのように変化してゆくかを示唆したことはよく知られている。

しかし、ここで提唱する段階説は、これらの大家の説とは、いろいろな点で異なっている。まず、ロストフの段階説には、経済の発展段階に応じて、成長率と投資率がどのように変るかということや、経済のどの部門がリーディング・セクタ